

## 韓医学の歴史

奇 昌 徳

外国の諸文献から、高句麗、百濟、新羅等の民族医学が存在していたことがよく知られているが、国内に残る文献によつて高麗時代に固有な医学が発展していたことが明らかになっている。朝鮮が開国したあとも、郷薬医学を継続して、純粹にわが国固有の医学が存在していた。その後、宣祖時代に、新たな形態の東医医学が生まれ、実用を目指した独自の医学体系を確立して、民族医学の新しい伝統が樹立された。

朝鮮時代の医療制度は、高麗の医療制度と変動がなく、継承されていたが、西洋の文物が開化の波に乗つて韓半島に上陸したとき、西洋医学を新しい医術として認め、導入した。朝鮮はこのときから西洋医学を受け入れたが、はじめは王室と官史の一部だけが西洋医学を認めた。一般大衆は慣習的に、または過去からの信頼から東医学を好み、西洋医学に対しては理解を示そうとしなかった。

甲午更張で、朝鮮社会が日本にならつて開化政策をとるようになったとき、日本は清国を韓半島から追い払い、公然と内政干渉を始め、さらに続いてロシアの近接を阻止し、積極的に政治、外交、軍事にまで関与した。そのとき日本は明治維新のときに行つた革命的改革を朝鮮社会で再演し、國權を蚕食し始めた。

それは医療界でも例外でなかった。いや、むしろ明治のはじめ、日本が漢方医を疎外した時よりもっと苛酷なやり方で、官から東医を除去し、また、抑圧しながら、少数の西洋医学教育を受けた医師だけを正当化した。その一方で統監

府の計画のもとで国公立医療機関を西洋医学機関に改編、または新設した。そして日本で過剰になっていた日本人医師を侵略の道具として大挙投入乃至は進出させた。

このような西洋医師優先の医療制度のもとで儒医をはじめ漢医師全ての東医が「医生」という限地医師の待遇に格下げされ、東医学の教育乃至研究機関は許認可の対象から除外した。当局は東医学に対してまったく関心を示さなかった。むしろ東医らの団体を瓦解しながら東医学を自滅に誘導していた。そこで当時の韓民族が国権回復に熱意を持って運動したのと同じように、東医らも東医学の復興を目指し、努力した。だが力不足であったために、結局、日本式の西洋医学だけが国民の生命を保護管理する唯一の保健政策となり、国民はこの方式にしたがわなければならなかった。東医らは講習会あるいは講習所にて西洋医学の一部を学び、これを応用した韓国特有の医療人、すなわち「医生」として国民保健に携わるようになった。東医すなわち漢方医は「神農遺業」という看板を出して、過去からの信頼を頼りに、民衆の隊列に潜跡していった。

日本が敗戦したあと、連合軍が韓国に進駐し、南韓に米軍政がはじまったとき、医生に格落ちしていた漢医師らがまづは医士会という名称で団結し、行政機関に漢方科を新設させたのである。ところが大韓民国が樹立され、政権が移管されたとき、行政機関の漢方科は削除された。六・二五動乱の間、釜山が臨時首都になったとき、政府がここに移って、国民医療法を制定したが、このとき漢医師制度が誕生した。その後、国民医療法を医療法に改正する過程で、漢医師制度は現代のように制定された。医療制度は完全に二元化されたのである。よって医療法で漢医師が韓医師となり、韓医学教育機関が六年制の韓医科大学に昇格し、韓医学会に二六の分科学会が創立された。また、民間の韓医学研究所が私立韓医科大学付属または私設で一・二カ所あり、保健福祉部(保健社会部)が支援する韓国韓医学研究院も設置されて、韓医学は西洋医学と同等に発展した。現在、韓方病院は一一五カ所、病床数の総数は六、五五九床あり、韓医科大学は十一校あって、毎年六百名の韓医師が誕生している。(ソウル大学校病院博物館附設素岩医文化史研究所)